

日本の鳥類の民間分類

Roger Finch

1. 分類方式

民間分類は、ある特定の文化の世界観を解明する手がかりとして興味があるのみならず、ある語族の一員における特定の語の用途の範囲に関して、同じ語族内の別の一員における同語源語（あるいは同語源語である可能性のある語）と比較した情報が得られるという意味で比較言語学の分野にとって特に重要である。

同じ語族に属する様々な言語の対応語を同語源語であると立証するにはよく知られた基準が2つある。ひとつは音韻基準で、この場合2つまたはそれ以上のことばの間の一致が確立された音韻論の音の法則に一致するのみならず、系統的でなければならぬ。二番目は語義の基準であり、この場合は意味の一致が十分緊密であると容認できることが求められる。

ある程度、音韻基準はかなり明白でありこの基準を満たすことは特に難しくはないが、次の理由で複雑である。ある特定の語族内のある言語がいくつかの他の言語より音韻的に豊かであるため、最初のケースでは、音素の結合が、その語族に属するいくつかあるいはすべての言語に欠如している音韻的実在物であるかもしれない一方、二番目のケースで、他言語のそのことばのどこかで音素が消滅していることにより、それらの言語における実際同語源語と他の言語の対応語との同一性が隠されている可能性があるからである。分析者が直面するもうひとつの問題は区分の問題である。なぜなら表面上同語源語と思われる2言語またはそれ以上の言語におけることばが、実際には一致しない対応語内のいくつかの位置で形態素境界によって結合された本質的に異なる形態素から構成されている可能性があるからである。あるいは他のことばが2つ以上の形態素で構成されているのに対し、ひとつまたは2つ以上のことばが単一の削減不可能な形態素から構成されている可能性があるからである。

しかしながら、同語源である可能性のある語を組み合わせることをより難しくするのは二番目の基準である。音韻的によく似ている2つまたはそれ以上の関連する言語におけることばが、この基準に反するように見える程かけ離れた意味を持って

いることがあるからである。そのような意味上のつながりをあいまいにする可能性のあるいくつかの要因はしばしば見落とされる。これらの要因の第一はことばの本来の語義構成要素に対する比喩の作用である。言語は、その言語を用いる言語共同体全体の産物であることがすでに事実として認められておりしばしば文献にも強調されているので、我々はその共同体を構成しているひとつの小さいグループから(あるいは実際ただ1人の話し手からでさえ)共同体全体に革新が容易に広がってゆき、その結果空想やユーモアあるいは皮肉によって誇張されたことばがやがて2つ目の意味を持つようになり、この意味が最終的に元の意味に取って代わることさえあり得ることを忘れがちである。

2番目の要素は意味の喪失である。ある言語(この場合、言語共同体全体によって共有されているものとして一般的に認められている言語)において特定の話者の記憶の中にのみ残存することばがあり得る。これは通常そのことばの指示対象物がすでにはっきり見えなくなっている(具象名詞の場合)、あるいはその概念が通用しなくなっている(抽象名詞の場合)、あるいはそのことばの元の意味場から広がった別のことばに置き換えられたときに起こる。具象名詞に関しては、指示対象がすたれてしまっているかもう見られない場合、あるいは言語共同体が指示対象が起こる地域から起こらない地域に移動してしまった場合にこのような現象が比較言語学分野で認められている。その例として動植物の名前が特によく挙げられる。忌み言葉も通常これら両方の意味上の変化を生じる。意味の喪失、元のことばが捨てられ、その忌み言葉の指示対象が禁止されなくなった後に何人かの話者の記憶から復活したとしても、その意味は変化し、忌み言葉の代わりとなる新しい意味を持つようになることがある。さもなければ、新しい音韻的実在物が作り出され、そのことばの意味内容がこの意味上の空白を埋めることになる。

同語源語であるかもしれない一対のことばの意味内容の容認性または信憑性の問題に関しては、「誰にとって容認できるものなのか」というもっともな問いに対する答えはもちろん「ほかの言語学者たちにとって」である。しかし、自国語でない言語、特に初期の時代にさかのぼる自国語以外の言語を扱うときに、我々は本当にネイティブ・スピーカーと同じ直観を持っていると主張できるのであろうか。特定のことばの意味の範囲(特に比喩に用いられる場合の)については、文献におけるそれらの用途をひとつひとつ調べることによりある程度突き止められるかもしれないが、特定のことばの頻出はおそらく主として慣習によって左右されていて、そのようなことばの関連の程度を推論できるのは比較的少ない場合に限られるである

う。ネイティブ・スピーカーの言語的直観をもってしてもほかのより馴染みのあることばから発生したと思われる、あるいはほかの知っていることばで構成されている、あるいは似たことばを含むあることばの語源を言い当てるテストには失敗するかもしれない。ここで取り上げているトピックである鳥類に関することばを考える際に、‘shoveler’（ハシビロガモ）、‘spoonbill’（ヘラサギ）、‘wagtail’（セキレイ）、‘warbler’（鶯）、‘flycatcher’（ヒタキ）などの語源は容易に推測できるであろう。また‘sanderling’（ミユビシギ）が‘sand’に由来することや、‘stilt’（竹馬の片方）が鳥の並外れて長い脚を意味し、‘nightjar’（ヨタカ）が夜耳障りな音を立てる鳥を指すことを正しく推測できるかもしれない。しかし、‘booby’（カツオドリ）‘mew’（カモメ）‘knot’（オバシギ）‘hobby’（チゴハヤブサ）‘wheatear’（サバクヒタキ）‘stonechat’（ノビタキ）‘nuthatch’（ゴジュウカラ）についてはどうだろうか。

共通基語の音韻の一覧表と共に共通基語内のことばを再構築し、再構築された形から証明された形を正確に引き出す一連の音の法則を書くのに十分な数の確かな例を同語族のすべての言語から取り出し、共通基語を再構築することは、何千という例を選び出さなければならない時間のかかる骨の折れる過程である。印欧基語の再構築に要した過程を振り返ってみれば、これは印欧基語の音韻体系の基本的枠組みが解明され、そこから次の研究段階が全般的音の法則の例外の問題の解決に向けられるまで、最初もっとも顕著な例から始められたことは明白である。

音の法則の例外の問題を扱うための方法は色々あり、明らかにもっとも直接的な方法は、調査すべき音を含む（語頭、語中、語尾にあるか、ほかの特定の音素と結合しているかどうかにかかわらず）すべての例を抽出することである。しかし、これもまた時間のかかるプロセスである。もうひとつの方法は、ひとつの特定の限定された、しかし少なくともほとんどの音の一致の代表的な例を含む量のコーパスに焦点を当てることである。この方法で調査する人は、予備研究の結果すでに前提とされた結論を確認することが多い例のみを選び抜くことで避けられる可能性のある、音の法則に対して不規則なものや例外も扱わざるを得ない。限られた語彙のコーパスの例としては、1) すべての基本動詞、2) すべての基本形容詞、3) ある語義分野（たとえば地理的特徴、動物、植物など）に属するすべての名詞がある。以下に記す鳥に関する日本語のことばの研究はアルタイ語の動物名の調査のための大規模なプロジェクトの一部である。

2. 民間分類と分類体系

民間分類における分類体系を論じる上で、いくつかの文化における「生物の世界を描写するための概念体系」(ベルリン：1978)の基礎をなすある特性と、存在を認められているすべての特徴的な動植物の分類に用いられる特定の言語における用語の意味構造に関して民族生物学者たちの意見は概ね一致している。

民間分類におけるカテゴリーの階層は、少なくとも生物の階層である「界」と(下に向かって)「属」, 「種」, 「変種」に関する限り、科学的分類の階層に従っている。しかし、生物分類法においては「門」, 「綱」, 「目」, 「科」と分類されている「界」と「属」の間の分類群の階層で、主要なカテゴリーを構成するものが何であるかについて、民間分類ではしばしば認識の差がある。ある言語では同じ科学的階層の用語が、ある場合には門全体を指すのに対し、別の場合にはひとつの科のみを指し、ひとつの目に属するものすべてを、例えば別の綱に属するものと一緒にある綱の下に置くなど、用語が境界を越えることもある。両生綱の場合、科学的分類は

綱：両生綱

亜綱：平滑両生亜綱

目：カエル目

目：サンショウウオ目

目：サイレン目

しかし民間分類ではサンショウウオ目はカエル目とは分離され、トカゲ(ヘビと同じく爬虫綱の有鱗目に属する)と同じグループに含まれる可能性が大きい。一方、「うなぎのような体形で後脚がなく、前脚の痕跡のみがあり」、川や池に棲むサイレンは魚類と考えられるであろう。また、魚類に関しては、魚は「冷血水生脊椎動物... 特徴としてはひれ、えら、流線型の体をもつ」ものとしてはっきり認識できるので、おそらくどの言語においても「魚はあくまでも魚」と言われるかもしれない。しかし、生物学者によると「ほとんどの脊椎動物が魚であり」、両生綱、爬虫綱、鳥綱、哺乳綱に対応する魚類の綱がなく、代わりに民間分類では「魚類」として分類されるであろう4つの綱がある。さらに、英語では、'starfish' (ヒトデ), 'jellyfish' (クラゲ), 'devilfish' (マンタ/タコ)などの無脊椎動物をそれらの形態よりも単に生息環境に基づいて水生動物に含んでいるように、これらの分類のあるものは「脊椎動物」の特徴より「水生動物」の特徴を強く持っているかもしれない。民間分類の分析において「界」のすぐ下の分類階層として「生活形」という用語が提案されたのはこの理由のためである(Berlin: *op.cit.*)。

ほとんどの民間分類ではクジラやイルカをほかの哺乳類と同じ綱に含まないかも

しれないが、これはそれらの種類のメスが子供に授乳するという事実を無視しているというより、むしろそれらの海生動物としての生活形態による可能性が強い。同様に、ビーバー、マスカラット（げっ歯目）、カワウソ、アシカ、アザラシ、セイウチ（食肉目）、マナティー、ジュゴン（海牛目）およびカバ（偶蹄目）には脚（あるいはひれ足）があり陸上で生活する時もあるので、クジラやイルカとは分離されるかもしれないが、同じ目に属すほかの哺乳動物とは区別され、少なくともある種のもの、程度の差こそあれ、通常魚やその類のものや水生植物を餌とし水中で生活するので、一緒の分類に入れられるであろう。そのような区別を特徴づける Intermediate(中間) というもうひとつの民間分類群の可能性が提案されている。

対象となるものをグループに分類する基礎となる原則は従来類似性の概念であった。Quineによれば、「我々の類似性の感覚—ものを種別に分類すること—より以上に思考と言語の基本となるものはない」（1969年）。TverskyとGatiによれば、「類似性関係の理論的分析は幾何モデルによって支配されてきた。そのようなモデルは各物体をある座標空間内の一点として表し、点と点の間の測定距離が各々の物体間の観察された類似性を反映する」（1978年）。つまり、この空間内で観察される物体が近ければ近いほど、観察者にはそれらがより類似しているように見える。この知覚空間は、近接、類似、共有、象徴、心理的距離などの要素を含む経験上の対象に基づいている (loc.cit.)。分析の目的（すなわち分類体系の焦点）は、観察される類似性に基づき（最小次元の）空間内に物体の位置を見つけることである。これらの物体の互いの位置を決定する座標は、もちろん観察者自身の近接度により決まり、それは観察者の経験の度合いによる。離れた所からはこれらの物体はよく似ているように見えるであろうが、もっと接近すると（観察者がそれらに精通するという意味で）物体はもっと離れて見えるかもしれない。意味空間にこれらの物体の絶対的定点はない。なぜならこれは観察するものの詳細についての観察者たちの意見の一致次第であるからである。名称をつけることに関しては、観察者間の一致の程度が大きいほど同じ物体に対する名称の数は少ないであろう。物体からより遠いところにいる観察者は異なった描写をするであろう。

類似性への幾何学的アプローチの根底にある仮定に反論を唱えた著者もいる(例: Tversky: 1977年)。彼はその代わりに類似関連の分析に「特徴理論的」アプローチを提案している。「このアプローチでは各物体 a が A と表示された一連の特徴で特徴付けられ、 a の b との間に観察される類似はそれらの共通する弁別的特徴の関数として表現される。こうして物体間の類似は、座標空間内の点の間の距離としてより、

特徴を照合する関数として表現される」。図式的にはこれは、レンズの一方がAのすべての弁別的特徴を表し、他方がBのすべての弁別的特徴を表す部分的に重なる二つの円として表すことができる。重なり合う部分は共有されるAとBの特徴を表し、重複部分外の部分（またはレンズ）はAとBの違いを示す弁別的特徴のすべてを表す。重複部分が広いほど2つの物体の類似性が大きく、完全に合致すれば完全同一性を意味する。

実在物を特徴づける構成要素としての弁別素性の概念は、ヤコブソン、ファント、ハレ（1963年）によってある語音を別の語音と区別する要素を客観的にできるだけ正確に指摘する手段として初めて言語学界に紹介された。弁別素性の概念は音韻論の分野（レキシコンの中のあるものが特定の音韻規則の例外であることを示すのに役立つ[+Latin]のような発音区別のための特徴を含むようになった）から統語論の分野へ広がったのだが、レキシコンの全記載項目と他のすべての項目とを区別するのに役立つであろう意味上の弁別素性の完全な一式を構築する試みはこれまでなされていないようだ。ある言語の一語一語の意味上の構成要素を分析する過程の複雑さと、これを実行するのに必要な個々の特性の膨大な量を考えれば、これは驚くべきことではない。

しかしながら、*beautiful*, *fast*, *small*, などの類義語のグループのような限定されたコーパスのための弁別素性の一式を作ることは可能である（そして実際試みられたことがある）。この場合はこのグループをほかのすべてのグループと区別する特定されない仮定の構成要素の基礎を築き、この基礎からグループ内の各メンバーをほかのどれからも区別するものを特徴として明らかにすることが可能である。例えば、*beautiful*から‘pretty’や‘gorgeous’を、*fast*から‘speedy’や‘fleet’を、*small*から‘tiny’や‘petite’を区別するように。

3. 鳥類に関する日本語

自生のもので定期的あるいは不定期に訪れてくる渡り鳥を含めて約450種類の鳥が日本で見られる。これらは73の科に分類され、その中のあるものは1種あるいは2—3種しか含まず、またあるものは50を超える種を含むものまである。これらの鳥を表すのに使われることばは主要部名詞から成り、これは属名と等しくみなされ、この主要部名詞の前に修飾語（ひとつの形容詞か名詞、あるいは様々な順番と組み合わせで名詞と形容詞と動名詞が組み合わせられた複合名詞）がつくことがある。こ

の修飾語は種の名前に等しいものとみなされることがある。ほかの場合では、修飾語（または種の名前）の役目を果たすものと同様な言葉の組み合わせ（名詞+形容詞または形容詞+名詞）が、主要部名詞の代わりにくる場合があり、これは種+属名の切り詰められた形と考えられるであろう。ある場合には元の属の名前が、前の文章の中で明らかにされていたり、その語が分類順のどこに出ているかによって推測できる。しかし、元の属の名前が何であったかを判断することがいつでもできるとは限らないので、動物分類法にしたがってこれらの語を順番に並べた（日本野鳥の会出版のハンドブック *A Field Guide to the Birds of Japan* に使われている）。

日本の鳥のかなり多くの語が中国語からの借用語か中国語で作られた名称のどちらかであり、これらはある場合はすでに証明されている語義借用語の日本語である（*haku-chou*「白い鳥」=「白鳥」<Jap. *shira-tori* 'id'）。そのような語に日本固有の別名がない場合それらはリストから省いた。日本語の別名がある語の場合は、その語が中国語で置き換えられなかったとしたら証明されている別名のうちのどれが優勢な用語として残ったかを判断するのはほとんどの場合不可能なので、動物分類法による順番で載せている。唯一の例外はもちろんそのような語が日本語の古語である場合である。

属の中の様々な種を、分類群のほかのメンバーと区別する修飾語のついた属名によってではなく、ユニークな用語（普通名詞）で区別する程度には言語により大きな差がある。たとえば、英語では一般的に 'duck' と呼ばれている鳥に15もの固有の名称がある（マガモ、ハシビロガモ、コガモ、シマアジ、オカヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、オオホシハジロ、ホオジロガモ、ヒメハジロ、スズガモ、コオリガモ、クロガモ、ケワタガモ）。一方日本語ではこれらの種はすべて単にカモとされている（但しアイサ属の潜水ガモをアイサという語でカモと区別している点では日本語と英語は同じである）。英語には *Scolopacidae*, *Rostratulidae*, *Recurvirostridae*, *Phalaopodidae* 属に属す鳥の20の名称があり（アメリカイソシギ、イソシギ、ハマシギ、ミユビシギ、オバシギ、エリマキシギ、キョウジョシギ、アカアシシギ、キアシシギ、アオアシシギ、キアシシギ、オグロシギ、オオハシシギ、シャクシギ、チュウシャクシギ、タシギ、ヤマシギ、セイタカシギ、ソリハシセイタカシギ、ヒレアシシギ）、これらは日本語ではすべてシギという属名がつけられている。*Muscicapidae* 属の鳥の名称は7つある（flycatcher, pewee, redstart, bluechat, wheatear, stonechat, bushchat）が、日本語ではヒタキという一語のみである。一方、'owl' に対しては日本語では「フクロウ」と「-ヅク」（ツク<古語

tuku) の2語があり, 'pheasant' にも2語 (キジとヤマドリ), 'cuckoo' には3語 (カッコウ, ツツドリ, ホトトギス), 'woodpecker' には2語 (ケラ, キタタキ), また, ホオジロ科の各種の鳥には6語 (ホオジロ, カシラダカ, ホウアカ, アオジ, ノジコ, クロジ) がある。

4. 鳥類の弁別的特徴

鳥類の名称に用いられる名詞のように閉鎖的コーパスの場合には, 各々の種をその特徴によってほかの種と区別するのに役立つ一連の弁別的特徴が, その言語で用いられるこれらの相違点を表す特定の用語を考慮して考案されることが考えられる。野鳥観察者の観点から見ると, それぞれの種を見分ける助けになるものとして注目されるある顕著な特徴がある。これらのひとつは大きさであり, ほかに生息地, 食べ物, 共通性 (前述の「近接性」という要素によって示される点), 体全体の色や, 体全体の色とは異なる頭頂部, 目のまわりの模様, 首, 胸, 腹, 翼, 尻, 尾など体の特定部分に注目した身体的特徴 (その種のオスとメスの間に見られる相違点を含む), それから嘴, 脚, 足, 尾の (大きさなどの) 特徴, とさかの有無, そしてもちろん鳴き声の描写 (楽譜のように記す場合も), これは姿が見えなくても近くにその鳥がいることを気づかせるので野鳥観察者にとって特に重要である。

一連の弁別的特徴をもっとも一般的なものからより特有のものへ進めて行くと, 最初の特徴は動かない生物 (植物界) と動く生物 (動物界) を識別するものであり, 次により特定の特徴が鳥綱 (鳥類) をほかのすべての脊椎動物から区別する。さらに別個の特徴が, ある特定の言語において知られているすべての種を最終的にほかのものと識別する役目をするであろう。

そのような一連の特徴は次に挙げるものであるかもしれない: [+名詞]; [+有形の]; [+生きている]; [+有生の] (「植物とは区別して動物の, または動物に関連した」); [+脊椎のある, 脊椎動物門に属する] (魚類, 両生類の動物, 爬虫類の動物, 鳥類, 哺乳動物を含む); [恒温性] (「温血の」, 鳥類と哺乳類をその他の脊椎動物と区別する); [+翼のある] (「羽毛の生えた」と「翼のある」を意味する), これは鳥綱を哺乳綱と区別する特徴である。[-空中の]という特徴は飛ばない鳥 (ペンギン, ダチョウ, レア, ヒクイドリ, エミュ, キーウィ) をほかの鳥と区別する役目をするであろう。これらの鳥は飛ばないのに翼の名残があったり, あるいはペンギンの場合のように翼が水面下で泳ぐのに便利なひれ足へと進化している。

特定の目, 科, 属, 種の特徴を示すその他の特徴のいくつかは「生息地」に関連する: [水生の]; [海洋の] (淡水に生息する鳥に対して海鳥); [高山性の] (山岳地帯や森林地帯に生息する鳥を平地や野原に住む鳥と区別する); [樹上性] (地上に生息する鳥に対して樹上に住む鳥); [移動性の]; [どこにでもいる] と [特定の地域にいる]; (最後の二つの特徴は民間分類の場合特に重要な意味を持つ。なぜなら珍しい鳥はそのために作られた語ではなくおそらく借用語あるいは新造語の名称をつけられ, ある特定の地域だけにいる鳥類は方言のみの名称をつけられる可能性があるからである。); 「食べ物」に関連する特徴としては, [草食] (肉食の鳥に対し種とベリー類のみを常食とする鳥) と [捕食性] (猛禽や魚を捕る鳥類をカラスのような清掃動物や死肉を常食とするハゲワシ・コンドルなどの大型猛禽類と区別するのに役立つ) がある。

その他のさらに細かい特徴が鳥類野外観察図鑑に見られ, これらは体の大きさ, 形, 色, 模様, 体の特定の部分 (嘴, 翼, 尾など) の大きさと形, 習慣 (とまり方, 尾の動き, 木登り活動, 飛び方) であり, このような際立った特徴は (属あるいはある上位または下位部門と同等であるかもしれない) ある特定の分類群内において日本語で個別の種につける名称によく見られる。それ以外の場合には, このような体の特徴や行動のタイプは, ある種に特有の語を与えるのに十分な特徴を示している。たとえば, 'duck' の一般的な語は「カモ」であり, その種の名前には (マガモのように) 明示的に, あるいはある種を指す描写的語として暗示的に使われている (例: ハジロ, 文字通り訳すと「羽が白い」, ホシハジロと同類の色々な種を指す)。フクロウの頭に耳のように見える羽毛のふさがあることからミミズク (「耳がついている」という意味, 大抵ただズクと短縮される) という弁別的名称が生まれ, これはワシミミズク属, コシミミズク属, コノハズク属, アオバズク属などの中の耳のあるフクロウのグループを指し, フクロウと呼ばれる「耳のない」別のグループと区別している。しかしながら, これらの民間用語には一貫性を欠くところがある。なぜなら, 「耳」のあるowlにもフクロウとして分類されているものがあり (シマフクロウ), 「耳」のないもの (アオバズク) が (ミミ) ズクに分類されている。自生のキジに関しては, オスの頭と首と腹部がダークグリーンで顔には赤い肉垂があるコウライキジ (common pheasant) はキジという元の用語で呼ばれている (<古語 *kigisi*, cf. 朝鮮語 *kkweng*, モンゴル語 *kiryuul*~*yuryuul*) 一方, 主に赤茶色で, コウライキジ (*Phasianus colchicus*) のような鮮やかな彩りを欠く copper pheasant はヤマドリ (「山の鳥」という新造語で呼ばれる。

グループの各メンバーを一意的に決定する十分な数の特徴を前提として設けるためには、ひとつの語義のカテゴリー（上記の最初の4つの弁別の特徴をもつ動物界全体のような）を詳細に分析する必要があるだろうが、ある特定の言語の全音素の中の各音素をほかのすべての音素と区別するのに用いられる一組の特徴の場合のように、これは各実在物に特有の特徴を割り当ててではなく、経済の原則に従って、そのセットのほかのメンバーと共通する特徴をある方法で組み合わせたり交えることによって行われる。例えば、哺乳綱に当てはまるのと同じ特徴 [+水生の] はクジラ、イルカやカワウソなどの動物を陸上の哺乳類と区別するであろうし、[+海洋の] という特徴はクジラ、イルカ、ラッコを川カワウソ、ビーバー、マスカラットと区別するであろう。同様に、[+空中の] という特徴は、翼手目（コウモリ）全体及びムササビ（モモンガ）やオオコウモリをその他の陸上動物と区別するのに用いられることが考えられる。

科学的動物分類の根底となる特徴には、解剖を通してのみ明らかにされるある専門的解剖学上の特徴がある一方、民間分類上の特徴は必然的に外観、行動、生息地などに基づいているので、科学的分類用の特徴は民間分類用のものと異なることになる。科学的分析に基づいた一連の世界共通の特徴は、自然史を通して動植物についてわかっている限りでは現在実用的であるが、民間分類用の正確な一連の世界共通の特徴を前提として定めることは、様々な言語における十分な数の動植物用語が分析・比較されるまで不可能であろう。そしてそのような研究の結果を待ち受けるもっとも興味ある問題のひとつは、どの程度民間分類の一般的分類法が生物学者のものとも一致するかということである。

5. 結論

日本語には鳥類の民間分類名として101（ことによると111）の用語がある。この内12は複数の科を含む類名（異なる「科」の科学的分類群に属するものを含む）であり、ほかの20は相当する科学的分類よりさらに細かく区別しており（即ち、同じ属内の種類に2つまたはそれ以上の異なる分類名がある）、また別の12は相当する科学的分類より少なく区別している（これらの分類名は2つまたはそれ以上の異なる属の種類を指している）；日本語の残りの民間分類（最低57）は科学的分類における属名とぴったり一致する。

最初の3つのカテゴリーの分類名の例：

グループ 1

- カモメ (15.5) : *Laridae*(カモメ科) : *Larinae*(カモメ亜科)
フルマカモメ (8.1) : *Procellaridae*(ミズナギドリ科)
トウゾクカモメ (14.3) : *Stercorariidae*(トウゾクカモメ科)
- サギ (=ゴイサギ) (16.9) : *Ardeidae*(サギ科) (サギ・サンカノゴイ・ヨシゴイ)
ヘラサギ (18.3) : *Threskiornithidae*(トキ科) (トキ科の渉禽類・ヘラサギ)
- チドリ (24) : *Charadriidae*(チドリ科)
ツバメチドリ (26.1) : *Grareolidae*(ツバメチドリ科)
- シギ (25) : *Scolopacidae*(シギ科) (小型シギ)
タマシギ (27.1) : *Rostratulidae*(タマシギ科)
セイタカシギ (28.1) : *Recurvirostridae*(セイタカシギ科)
アカエリヒレアシシギ (29.1) : *Phalaropidae*(ヒレアシシギ科)
- タカ (30) : *Accipitridae*(ワシタカ科) (タカ, ワシ, コンドル)
ヨタカ (40.1) : *Carprimulgidae*(ヨタカ科)
- フクロウ (32.6) : *Stringidae*(フクロウ科)
ミナミメンフクロウ (33.1) : *Tytonidae*(メンフクロウ科)
- ヒバリ (48) : *Alaudidae*(ヒバリ科)
キヒバリ (50.11) (別名: ビンズイ)
タヒバリ (50.13) : *Motacillidae*(セキレイ科) (セキレイ・タヒバリ)
イワヒバリ (57.1) : *Prunellidae*(イワヒバリ科)
- ツバメ (49.5) : *Hirundinidae*(ツバメ科)
ヒメアマツバメ (41.2) : *Apodidae*(アマツバメ科)
ヤマツバメ (70.1) (別名オウチュウ) : *Dicruridae*(オウチュウ科)
モリツバメ (72.1) : *Artamidae*(モリツバメ科)
- ヒヨドリ (52.2) : *Pycnonotidae*(ヒヨドリ科)
イソヒヨドリ (58.16) : *Muscicapidae*(ヒタキ科) (ツグミ, ウゲイス, ヒタキ)
- カラ (58D) (シジュウカラ) : *Paradoxornithinae*(ヒゲガラ)
コガラ (59.2) (アメリカコガラ) : *Paradae*(シジュウカラ科)
ゴジュウカラ (61.1) : *Sittidae*(ゴジュウカラ科)
ツリスガラ (63.1) : *Rimizidae*(ツリスガラ科)
- ウゲイス (58.32) : *Sylviinae*(ウゲイス科)
コウライウゲイス (71.1) : *Oriolidae*(コウライウゲイス科)

カラス (73) : *Coridae*(カラス科)

チシマウガラス (3.3) : *Phalacrocoracidae*(ウ科)

ウミガラス (6.1) : *Alcidae*(ウミスズメ科)

ヤマガラス (44) (ブッポウソウと同義語) : *Coraciidae*(ブッポウソウ科)

カワガラス (55.1) ; *Cinclidae*(カワガラス科)

グループ2

アビ

オオハム (*Gavia*)

アヒル

ヒドリ (*Anas*)

ケイマフリ

ウミバト (*Cephus*)

キジ

ヤマドリ (*Phasianus*)

カッコウ

ツツドリ

ホトトギス (*Cuculus*)

コマドリ

アカヒゲ (*Erethacus*)

マミジロ

ツグミ

アカコッコ [ツグミ]

ウタドリ (クロウタドリ)

マミチャジナイ (*Turdus*)

ホオジロ [シトド]

ノジコ (*Emberiza*)

グループ3

カリガネ (*Branta, Anser*)

カモ (*Anas, Tadorna, Aythya* 他)

ミズナギドリ (*Pterodroma, Calonectris, Puffinus*)

チドリ (*Charadrius, Eudromus, Glareola, Pluvialis*)

ワシ (*Haliaeetus, Aquila, Aegyptius* 他).

ミミズク (*Bubo, Asio, Otus*)

ウズラ (*Coturnix, Turnix*)

セミ (=カワセミ) (*Alcedo, Ceryle*)

ケラ (*Picus, Dryocopus, Dendrocopus*)

ヒタキ (*Phoenicurus, Tarsiger, Ficedula*)

ヒワ (*Carduelis, Acanthis*)

マシコ (*Carpodacus, Leucostricte*)

独立性が不明確な分類名は、元々主要部名詞(通常同じ科の中で)の修飾語であったか、あるいは初期の名前が中国語のことばかヨーロッパ語のことばかもしくは漢字で作られた擬似中国語のことばによって置き換えられたもののいずれかである。

これらの例には、

クグ(古語)(=ハクチョウ);ヒシクイ[カリガネ];ヒドリ[ガモ];ハジロ[ガモ](ホシハジロ);エビスクイ(<エビスクヒ)(=ペリカン);オズメドリ(=バン);ムナグロ[チドリ];イワトリ(ライチョウ);タトリ(=サケイ);ヤマガラス(=ブッポウソウ);シマソト(=ヤイロチョウ);ツツ(古語:*tutu*)(=セキレイ);サクラトリ(=サンショウクイ);アカコッコ[ツグミ];コクマル(=ハッカチョウ)などがある。

ある科に属する鳥が唯一あるいは主として中国語、またはそれらの鳥の英語名からの語義借用語によって知られているという事実は、それらの鳥の分布の記録から容易にわかることである。そのような科には次のようなものがある。

Phaethontidae(ネッタイチョウ科): 1. 南の島に生息(硫黄島や南鳥島) 2. 小笠原諸島や琉球諸島周辺の南の海域にたまに見られる。

Fregatidae(ゲンカンドリ科): 偶発的, 大洋中の島や海岸地帯

Pelecanidae(ペリカン科): 日本では偶発的, 海岸や大河

Otididae(ノガン科): 1. 冬季に迷い鳥として(数回の記録); 2. 偶発的

Jacaniidae(レンカク科): 迷い鳥, 沼沢地や蓮池

Tetraonidae(ライチョウ科) イワライチョウ: 2,400m以上の山の限られた地域に生息する珍しい鳥; エゾライチョウ: 北海道の限られた地域のみに見られる珍しい鳥

Meropidae(ハチクイ科) ('bee eater'の語義借用語): 偶発的, 宮古島と南琉球列島

Coraciidae(ブッポウソウ科): めったに見られない夏に渡来する鳥

Upupidae(ヤツガシラ科) (「8つの冠羽」からの新造語)：琉球諸島と対馬諸島に
たまに渡来, その他の地域では迷い鳥として飛来。

Pittidae(ヤイロチョウ科)：南日本の低い山に少数が夏鳥として渡来

Bombycillidae(レンジャク科)：1. 冬によく公園や低い山に渡来；2. 冬鳥として
よく見られる

Sturnidae(ムクドリ科) ハッカチョウ：台湾や中国から西日本へたまに渡来

Dicruridae(オウチュウ科)：九州や琉球諸島へ迷い鳥として飛来。

Oriolidae(コウライウグイス科)：日本へは旅鳥としてたまに渡来する。

Artamidae(モリツバメ科) (‘wood swallowの語義借用語)：琉球諸島で一回のみ記
録されている。

これらの科に属す鳥類の半数近くは海洋性の種であり, 日本列島ではそれほど珍
しくなかったとしても, 海岸地帯に限られる鳥類のための語が, アルタイ山脈の東
端近くの内陸アジアにあるどこか (いまだ未確認の) 元の祖国から移住した民族
(Rouse: 1986, 77頁) の語彙の中に存在していたとはありそうもないことである。
また, 日本語には近隣のアイヌ民族の言語からの借用語の例がほとんど存在しない
が, もっとたくさんの例がありさえすれば, これが珍しい種につけられた語彙の源
であった可能性がある。

海鳥の残りの2つの科, *Alcidae*(ウミスズメ科) と *Hydrobatidae*(ウミツバメ科)
も日本では珍しい。ウミスズメ科の鳥の状態について観察されていることといえば,
北日本 (おもに北海道に限られる) の遠洋海域と沖合の島々にたまに冬鳥として渡
来するということと, ウミツバメ科に関しては, ある種は太平洋岸沖合への迷い鳥
であるか, 北日本の海域へたまに渡来する鳥である, または沖合への旅鳥, または
(ある1種の場合は) 日本の両沿岸に毎夏渡来する鳥であるということである。

ウミスズメ科の大部分とウミツバメ科のすべてが「海」という語とその後に続く
名詞から成る名称を持つ；これらの語の意味の分析は, それらの鳥を主として川や
湖の近くに住むほかの水鳥と区別するための特徴 [+海洋の] を含んでいると言え
るかもしれない。接頭辞「ウミ」に続く名詞はほとんどの場合「カラス」とか「ハト」
のような陸に住む鳥を指す語であるが, [ウミネコ]という語だけは文字通りには「海
の猫」という意味になる。(cf. カモメを指すネコトリ (猫鳥) やハマネコ (浜猫)
などの類義語)。海鳥の名称としてこの接頭辞「ウミ」を特に用いるために, ある
特定の分類群のメンバーを指すものと考えられるかもしれないが, 「カワ」(川), 「タ」
(田), 「イワ」(岩), 「ヤマ」(山) も同様に単に生息地を特定するために異なる属

の鳥類の接頭辞として用いられている。

白い胸と腹部にもかわらず実際カラス（あるいはミヤマガラス）に似ている「ウミガラス」を除いて、このグループの海鳥はその名前の由来となる陸の鳥類とはむしろ似ていない。そしてこれらの言葉は大部分同じ生物学的分類に属すが、確固とした民間分類群を構成しない種類のためにかなり最近できた新造語のようである。アルタイ語圏の反対側の端では、アナトリアのトルコ系民族はヒメウミツバメのような馴染みの薄い海鳥を呼ぶのに *firtına* (*kuşu*), トウゾクカモメやカモメに *martı* と外国語から（この場合はイタリア語）ことばを借用している。

日本語の鳥類の名前の多くが記述語（（形容詞または副詞）＋「トリ」（鳥）という語でできている。これは英語における 'bluebird', 'blackbird', 'catbird', 'cowbird', 'mockingbird' などの語の組み立てに匹敵する。「トリ」（*tori*）という語はモンゴル語の *toruu*（ミヤマガラス）（<**toriyu*）と同語源であり, *turlay*（やはりミヤマガラス）, *turlaki*（コクマルガラス）の語根**tur*-である（cf. *torlu*-（鳥の鳴き声）：OT *toriya*（ヒバリ）；Chag. *torıyay*; Az. *toriıyay*, Osm. *torıyay* 'id.'). 鳥類の名前に見出されるその他の明らかにかつては独立していた形態素には *kara-su*（カラス）, *ugui-su*（ウグイス）, *kake-su*（カケス）の /-su/；それだけで「サギ；シラサギ」を意味するが、元々は「鳥」を指す語であったかもしれない *sagi* (cf. 朝鮮語 *say* 「鳥」<**sagi*; *saykki* 「（動物の）子」がある。*sagi* は *kasa-sagi*（「笠鳥」）（カササギ）という語の一部でもある。ここでは *kasa*（笠；鳥の頭の毛；鳥の冠）はオナガ（英名：*Cyanopica cyana*）の黒い頭の毛を指している。現在では *su* は「巢」あるいは「ミツバチの巢」を意味するが、元々は「群れ」を意味したかもしれない。*su*（あるいはその変形の [-zu]）もほかの動物、例えば *kirigirisu*（キリギリス）, *namazu*（ナマズ）, *kawazu*（カエル）, *mimizu*（ミミズ）, などの語の接尾語として現れ、モンゴル語のいくつかの動物名（*nuGusun*（アヒル）; *silegüsün*（ヤマネコ）, *bögesün*（シラミ））に見られる共通の接尾語 [-sUN] と語源が同じである。

アルタイ語族の各語派において立証されている形が共通の語根から発展してきたその派生過程を示し、また、これらの言語のそれぞれの語の話し手によって分類法が異なる原因となった彼らの世界観を理解する手掛かりを得るためには、5つに分岐したアルタイ語系の言語（チュルク・チュヴァシ語、モンゴル語、（満州）トゥングース語、朝鮮語、日本語）に属する、かなりの数の再構築された形を生み出すことができるだけの、少なくともほとんどのグループに共通する語を提供するのに十分な数の語彙を含むコーパスが動物界の4つの綱、哺乳綱、鳥綱、爬虫綱、両生

綱に対して必要である。

Appendix: Birds of Japan

1 Gaviidae(アビ科)

1.1 abi(*Gavia stellata*)

1.3 ouhamu(*Gavia arctica*)

2 Podicipedidae(カイツブリ科)

2.5 カイツブリ (*Podiceps ruficollis*); 古語 ニポドリ (～ミポドリ) 'id.'

3 Phalacrocoracidae(ウ科)

u「鵜」(中国語で「ペリカン」を意味する漢字を用いるが、おそらく中国語のwu「カラス」から来ていると思われる; wu「カラス」); 古語 u 'id.'; 同義語: u-no-tori;

shimatsutori(1666: 1712); unri(<アイヌ語); mizu-no-karasu(“水のカラス”)

3.1 kawa-u(*Phalacrocorax carbo*)

3.2 Chishima-ugarasu(*P. urile*); ugarasu = u + karasu, cf. *Infra*.

4A Anatidae(カモ科, ハクチョウ)

(hakuchou) (“白い鳥”)「ハクチョウ」(*Cygnus spp.*); 古語kugu(～kugutu～kugupi); siratori(～sirotori) (“白い鳥”)「ハクチョウ」; 同義語: kuguhi(1666; 1712); kou(kofu); shiratori; tazū; retafu-chiri(<アイヌ語retat'chiri “白い鳥” = 「ハクチョウ」)

4B Anatidae(カモ科, ガン)

karigane「ガン」; 古語. kari(～karigane)「ガン」(*Branta, Anser spp.*); 同義語: kari; kumo-tori(“雲鳥”); nikidori.

4.12 hishikui(*Anser fabalis*)

4C Anatidae(カモ科, カモ)

kamo「カモ; マガモ」(*Anas, Tadorna, Aythya et al. spp.*); 古語 kamo(～

- kamotori) ‘duck (*Anas* spp.)’; asigamo (カモの総称); 同義語: kamotori; ashikamo; awohatori; wokitsutori; mikamo; 方言: 北海道 gome; 青森／岩手 aokubi; 八戸 kamome; 島根 gara; karikari; ajimura (-gamo); 鹿児島 motori; 沖縄 gatoi (～gatori～hadori)
- 4.17 ma-gamo (*Anas platyrhynchos*); 古語 makamo; mikamo (“水のカモ”): 水上に生息するカモ, 特にマガモを指す。
- 4.18 ahiru (*Anas platyrhynchos domesticus*): 同義語: ahi (～ahiro～ahigamo); kamohiru; hashikuro; 方言: 青森 ahiru; 新潟 ahero; 長野 aseru; 和歌山 hiru; 岩手 ahiahi; 沖縄 appira (～apira); 秋田 mizugam; 石川 kamokamo; 福島 jigamo (～chigamo); 茨城 batta; 三重 pappa; 長崎 bibi; 佐賀 biko
- 4.28 Amerika-hidori (*A. Americana*)
- 4.29 akahashi-hajiro (*Netta rufina*)
- 5 **Merginae (Mergansers) (アイサ属の潜水ガモ)**
aisa (*Mergus* spp.); 古語 akisa 「ウミアイサ; カワアイサ」 (*Mergus serrator*; *M. merganser*); 「ミコアイサ」 (*M. albellus*)
- 5.1 miko-aisa (*Mergus albellus*)
- 6 **Alcidae (ウミスズメ科)**
- 6.1 umigarasu (“海のカラス”) (*Uria aalge*): cf. infra.
- 6.3 keimafuri (*Cephus carbo*); 同義語: shiriakadori (1735-40); ugamo; shichiri
- 6.4 umibato (“海のハト”) (*C. columba*)
- 6.6 umisuzume (“海のスズメ”) (*Synthliboramphus antiquus*)
- 6.8 umioumu (“海のオウム”) (*Aethia psittacula*)
- 6.12 utou (*Cerorhinca monocerata*); 同義語: hanatori; tsunagitori; yasukata; yonatori.
- 6.13 etopirika (*Lunda cirrhata*): アイヌ語 etohirika (～etopirika)
- 6.14 tsunomedori (*Fratereula corniculata*)
- 7 **Diomedeidae (アホウドリ科)**
- 7.2 ahoudori (*Diomedes albatrus*)

- 8 **Procellariidae** (ミズナギドリ科)
mizunagi-dori (*Pterodroma*, *Calonectris*, *Puffinus spp.*)
- 8.8 ou-mizunagidori (オオミズナギドリ) (*Calonectris leucomeles*)
- 8.16 anadori (*Bulweria bulwerii*)
- 9 **Hydrobatidae** (ウミツバメ科)
umitsubame (“海のツバメ”) (*Oceanodroma spp.*)
- 10 **Phaethontidae** (ネッタイチョウ科)
- 11 **Fregatidae** (ゲンカンドリ科)
- 12 **Pelecanidae** (ペリカン科)
(perikan) (*Pelecanus spp.*); 同義語: garachau (1712); ebisukuhi; natteu
- 13 **Sulidae** (カツオドリ科)
- 13.1 katsuodori (*Sula leucogaster*)
- 14 **Stercorariidae** (トウゾクカモメ科)
- 15.5 kamome (*Larus canus*): 同義語: kamame; kagome (kagomai); gome; kobu; uhami; nekosagi; nekotori; hamaneko; 方言: 石川 kawame; 鹿児島 kanbo; 新潟 gomi; 青森 gome; 北海道 gonbe; 鳥根, 熊本 kamo; 鳥根 shiragamo; iwashi-gamo; 福岡 umidori; 鹿児島 undori; 鳥根 ubami; 山形, 千葉 hamaneko; 富山他 nekodori
- 8.1 furuma-kamome (*Fulmarus glacialis*)
- 14.3 touzokukamome (*Stercorarius skua*)
- 15A **Laridae: Larinae** (カモメ科: カモメ亜科)
- 15.2 seguro-kamome (*Larus argentatus*)
- 15.3 umineko (“海の猫”) (*L. crassirostris*): 同義語: umikamome; shimakamome
- 15B **Laridae: Sterninae** (カモメ科: アジサシ族)
- 15.22 ajisashi (*Sterna hirundo*)

- 16 **Ardeidae (サギ科)**
- 16.9 goi-sagi (*Nycticorax nycticorax*): 同義語 : goi (1666; 1712); hoshigoi (1712); se-gurogoi; shirogoisagi; nabesagi; nabekamuri; ibi (~ihi)
- 16.2 yoshi-goi (*Ixobrychus sinensis*)
 sagi (*Ixobrychus, Ardeola, Egretta et al. spp.*); 古語 sagi 'id.'; 同義語 : shira-tori.
- 16.14 ko-sagi (*Egretta garzetta*)
- 18.3 hera-sagi (*Platalea leucorodia*)
- 17 **Ciconidae (コウノトリ科)**
- 17.1 kounotori (*Ciconia ciconia*) = kou-no-tori; 同義語 : kobu (1712); kau (kau-no-tori); kauzuru; kouzuru (1789); ohotori (1666)
- 18 **Threskiornithidae (トキ科)**
- 18.1 toki (*Nipponia nippon*); 古語 tuki 「トキ」 (*Nipponia, Threskiornis spp.*)
- 19 **Gruidae (ツル科)**
- tsuru (*Grus spp.*); コウノトリ (=kou-zuru); 古語 turu 「ツル」 (*Grus spp.*);
 tadu 「ツル」; コウノトリ (*Ciconia spp.*)
- 19.1 kuro-zuru (*Grus grus*)
- 20 **Rallidae (クイナ科)**
- 20.2 (ban) (*Gallinula chioropus*): ban (1712); 同義語 : ozumedori (1810); kawaki-ji; kurodori
- 20.3 kuina (*Rallus aquaticus*); 古語 kupina 'id.'
- 21 **Otididae (ノガン科)**
- 22 **Jacaniidae (レンカク科)**

- 23 Haematopodidae (ミヤコドリ科)
23.1 miyakodori (*Haematopus ostralegus*)
- 24 Charadriidae (チドリ科)
 chidori (*Charadrius*, *Eudromus* spp.); 古語 tidori 'id.'
24.2 ko-chidori (*Charadrius dubius*)
26.1 tsubame-chidori (*Glareola maldivarum*)
24.9 munaguro (*Pluvialis dominica*)
24.12 keri (*Microsarcops cinereus*)
- 25 Scolopacidae (シギ科)
 shigi (*Calidris*, *Tringa* et al. spp.); 古語 sigi 「シギ; キョウジョシギ; アカアシ
 シギ; キアシシギ」 (*Tringa*, *Xenus*, *Arenaria*, *Limosa* spp.)
25.3 hibari-shigi (*Calidris subminuta*)
25.11 hama-shigi (*C. alpina*)
- 26 Glareolidae (ツバメチドリ科)
26.1 tsubame-chidori: cf. *supra*.
- 27 Rostratulidae (タマシギ科)
27.1 tama-shigi (*Rostratula benghalensis*)
- 28 Recurvirostridae (セイタカシギ科)
28.1 seitaka-shigi (*Himantopus himantopus*)
- 29 Phalaropidae (ヒレアシシギ科)
29.1 akaeri-hireashi-shigi (*Phalaropus lobatus*)
25.9 kiriai (*Limicola falcinellus*)
- 30 Accipitridae (ワシタカ科)
30.1 misago (*Pandion haliaetus*); 古語 misago 'id.'; kakuganotori 'id.'
 washi (*Haliaeetus*, *Aquila* et al. spp.); 古語 wasi 'id.'; matori; 方言: 岩手

- washidaka; 鹿児島 kumadaka; 沖縄 washinudoi; basunudori
- 30.2 ojjiro-washi (*Haliaeetus albicilla*)
taka (*Accipiter*, *Spizaetus spp.*); 古語 taka 'id.'; kuti 'id.'
- 30.7 kuma-taka (*Spizaetus nipalensis*)
- 40.1 yotaka (*Caprimulgus indicus*)
- 30.10 hachikuma (*Pernis apivorus*)
- 30.11 tobi (*Milvus migrans*); 古語 tobi 'id.'
- 30.12 sashiba (*Butastur indicus*)
- 30.15 nosuri (*Buteo buteo*)
- 30.21 tsumi (*Accipiter gularis*)
- 31 Falconidae (ハヤブサ科)**
- 31.2 hayabusa (*Falco peregrinus*); 古語 payabusa 「ハヤブサ」 (*Falco spp.*)
- 32 Strigidae (フクロウ科)**
- 32.6 fukurou (*Strix uralensis*); 同義語: fukurofu (~ fukuroku); furutsuku (furit-suki); kakurefuto; toriohi; nekotori; kahoyodori; minawotori; yoyofu; yotsuku;
方言: 香川 fukuro-neko; 石川 fukuroku; 福井 fukuroko; 福島 furotsuku; 島根 furuzuku; 奈良, 和歌山 furukku; 長野 kineko; 山口 nekokku; 茨城, 福島 nekodori; 香川 fukuroneko; 三重 hoppo; 愛知 poppo; 岐阜 hohho
- 33 Tytonidae (メンフクロウ科)**
- 33.1 minami-menfukurou (*Tyto capensis*)
mimizuku (*Bubo*, *Asio*, *Otus spp.*); 古語 tuku 'id.'; 同義語: tsuku (tsukutori);
yozoku; imataka
- 32.2 washi-mimizuku (*Bubo bubo*)
- 32.4 torafu-zuku (*Asio otus*)
- 34 Tetraonidae (ライチョウ科)**
- 34.1 (raichou) (*Lagopus mutus*); raichou (1800; 1807); raiteu (1810); 同義語:
iwatori; taketori.

- 35 Turnicidae(ミフウズラ科)
- 36 Phasianidae(キジ科)
- 36.1 uzura(*Coturnix coturnix*); 古語 udura(uduratori) 'id.'
- 35.1 mifu-uzura (*Turnix suscitator*)
- 36.3 kiji(*Phasianus colchicus*); 古語 kigisi 'id.'; 同義語: kigishi(～kigisu); kurokiji; shirokigisu; utsubari; sametsutori; suganetori; metsutori; notsutori; miyukitori; 古語: 富山 aokubi; 奈良, 長崎 kijinotori; 島根 kijindori; 鹿児島 kishinotori(～kijinotori); 石川 kizu-notori; 奈良他 kenken; 新潟 kenkendori; 島根 kenkenbata
- 36.4 yamadori(*P. soemmerringii*); 古語 yamadori
- 36.5 niwatori(*Gallus gallus*); 古語 nipatori(～nipatutori); kake 'id.'; 同義語: kake(～kakero); kudakake; shirokake; niwatsutori; tori; ihetsutori; naganakidori; negi-notori; ushiwodori; usubetori; yakoenotori; shinkuro; 方言: 富山 kakero; 青森 kakkerokou; 愛知 keke; 愛媛 kekekokko; 山口 kerako; 奈良 kokako; 長野 niwakiji; 茨城 tokka; 岩手他 tottoko; 山口 toteko; 島根, 岐阜 totekokko; 大阪 tototo; 茨城 batta; 京都 hoho; 福岡, 長崎 poppo; 沖縄 yuyu
- 37 Pteroclididae(サケイ科)
- 37.1 (sakei) (*Syrhaptes paradoxus*); 同義語: tatori(1712); ebisusuzume; tokkut-susuzume; nataushinahi
- 38 Columbidae(ハト科)
- hato(*Columba, Streptopelia* 他); 古語 pato 'id.'; 同義語: shirohato; 方言: 愛知 kannatsubo; 宮崎 satoppo; 新潟 teteppa; 神奈川 teteppo; 埼玉 dedeppoppo; 島根 hoppo-kakapo; 栃木 houpome(～poupome); 奈良 chichidori
- 38.1 karasu-bato(*Columba janthina*)
- 39 Cuculidae(カッコウ科)
- 39.1 kakkou(*Cuculus canorus*); 古語 yobukodori(未確認); 多分 = kakkou; 同義語: kakkoudori(1666); kakkoutori(1735-40); kakko(1789); kuhakko(1800); kwakko; kappodori; tsuguri(1735-40); hakodori(hakko); mamemakidori;

- yobukodori.
- 39.2 tsutsudori (*Cuculus saturatus*)
- 39.4 hototogisu (*C. poliocephalus*); 古語 pototogisu 'id.'
- 40 Caprimulgidae (ヨタカ科)
- 40.1 yotaka; cf. supra.
- 41 Apodidae (アマツバメ科)
- 49.5 tsubame (*Hirundo rustica*); 同義語: kotsubame; madaratsubame; shirotsubame; tsuba (tsubakura~tsubakurame); shirotsubakurame; tsubakuro; higo (~hiigo); himetsudori; 方言: 青森他 tsubakura; 福島他 tsubakurame; 兵庫, 大分 tsubakurome; 岐阜他 tsuba-koro; 三重tsubakera; tsuwakuro; 大島 tsubafuro; 東京 tsubakiro (~subakuro); 和歌山 omuro; 京都 hiigo; 岡山 hiiko; 島根 fuigo; 鹿児島 mattari; 沖縄 mattara.
- 41.2 hime-amatsubame (*Apus affinis*)
- 49.1 iwa-tsubame (*Delichon urbica*)
- 42 Alcedinidae (カワセミ科)
- semi = kawasemi (*Alcedo atthis*); 古語 soni 'id.'; 同義語: semi; sebi; soni (-tori); sobi (-na); ebitori; sudori; hisui; muguri
- 42.1 yamasemi (*Ceryle lugubris*)
- 43 Meropidae (ハチクイ科)
- 43.1 hachikui (*Merops ornatus*)
- 44 Coraciidae (ブッポウソウ科)
- 44.1 (bupposou) (*Eurystomus orientalis*): buppousou (1810); 同義語: yama-garasu; miyamagarasu.
- 45 Upupidae (ヤツガシラ科)
- 45.1 yatsugashira (*Upupa epops*); 同義語: kabutoshigi; tsutsumisasagi

- 46 **Picidae (キツツキ科)**
kera = ki-tsutsuki (*Picus*, *Dryocopus*, *Dendrocopus spp.*); 同義語: keratsutsuki;
teratsutsuki' wokera; kukumito
- 46.1 ao-gera (*Picus awokera*)
- 46.4 kitataki (*Dryocopus javensis*)
- 46.5 arisui (*Jynx torquilla*); 同義語: arisuhi; owoarisuhi; koarisuhi
- 47 **Pittidae (ヤイロチヨウ科)**
- 47.1 (yairochou) (*Pitta brachyura*); 同義語: shimasoto (1810); matsubaratsugumi
(1810)
- 48 **Alaudidae (ヒバリ科)**
- 48.1 hibari (*Alauda arvensis*); 古語 pibari 'id.'
- 50.13 tahibari (*Anthus spinoletta*)
- 57.1 iwa-hibari (*Prunella collaris*); 同義語: kakihibari; kayahibari; kurohibari; shiro-
hibari; himehinadori; 方言: 愛知 kumosuzume; 熊本 yamasuzume; 岡山 inchi-
ro (~chinchiro); 鹿児島 chinchindori; 大分 chichibaro; 鹿児島 shokuri; 新潟
ichiroku; 富山 kabara-bashi; 茨城 udori; 鹿児島 gigi; 沖縄 gayabura; gazafuke;
zasafukema
- 49 **Hirundinidae (ツバメ科)**
- 49.5 tsubame (*Hirundo rustica*); 古語 tubame 'id.'; 同義語: tsuba (tsubakura ~
tsubakurame); tsubakuro; akatsubakurame; shirotsubakuro; ko-tsubame;
madaratsubame; higo (~hiigo); himesudori; 方言: 青森他 tsubakura; 福島他
tsubakurame; 東京 subakuro; Hach. chubakura; 兵庫, 大分 tsubakurome; 三重
tsubakera; 岐阜他 tsubakoro; 島根他 tsubasa; 大島 tsubafuro; 三重tsuwakuro;
愛知 tsumakuro; 和歌山 omuro; 岡山 hiiko; 鹿児島 matagarasu; mattari; 沖縄
mattasa
- 72.1 mori-tsubame (*Artamus leucorhynchus*)
- 50 **Motacillidae (セキレイ科)**
(sekirei) (*Motacilla*, *Dendronanthus*); 古語 tutu 'id.'; 'nipakunaburi 'id.';

- manabashira 'id.', cf. kigashira (-sekirei); 同義語: niwakunaburi (1666);
ishitsunagi (1735-40); ishitataki (= ki-sekirei, i800); ishikunagi; tsutsu; kawa-
asuzume; niwatataki; manahashira; mugimakitori
- 50.1 (ki-sekirei) (*Motacilla cinerea*)
- 50.11 (binzui) 'Indian tree pipit (*Anthus hodgsoni*)'; binzui (~hinsui, 1800); 同義語:
khibari (1800); tahibari (1810); inohi (1810); kakhibari; taniwahi
- 51 Campephagidae (サンショウクイ科)
- 51.1 sanshou-kui (*Pericrocotus divaricatus*); 同義語: sakuratori (1810); sakuradori
- 52 Pycnonotidae (ヒヨドリ科)
- 52.1 shirogashira (*Pycnotus sinensis*)
- 52.2 hiyodori (*Hypsipetes amaurotis*); hioydori (1712); 同義語: hiedori (1666; 1715);
ukihiedori; hanasuhi
- 58.16 iso-hiyodori (*Monticola solitarius*); 同義語: isotsumugi (1735-40); isotsugu (~
isotsugumi); iwatsugumi; iwatsugumi; agiso; todotori
- 53 Laniidae (モズ科)
- 53.1 mozu (*Lanis bucephalus*); 古語 mozu 'id.'; mozu (1666), 同義語: muzu (1810);
akamozu (1810); jimozu (1810); monzu; monzo; 方言: 神奈川 muzuki; 福
岡 mushikui; 山梨 muzutaka; 青森他 mozutaka; 山梨他 mozukichi; 鹿児島
mogitchan; 福島, 千葉 monki; 熊本 kichimozu; 三重, 兵庫 kichikichi; 岡山
azakagami; 東京 karakajime; 神奈川 karameki; 熊本 shimoyobi; 富山, 長野
suzumedaka
- 54 Bombycillidae (レンジャク科)
- 55 Cinclidae (カワガラス科)
- kawa-garasu (*Cinclus pallasii*); cf. infra.
- 56 Troglodytidae (ミソサザイ科)
- 56.1 misosazai (*Troglodytes troglodytes*); 古語 sazai 'id.'; 同義語: sazaki (1666); mi-

sosazahi(1666); takumidori(1712); misotsuku; misukuguri

57 Prunellidae(イワヒバリ科)

57.2 kayakuguri(*Prunella rubida*); 同義語: kayaguki; kayamuguri; kayamashiko;
awosazai(～awomisozazai); yamasazai; ko-agari

58 Muscicapidae(ヒタキ科)

58A Turdinae(ツグミ亜科)

58.1 komadori(*Erithacus akahige*)

58.2 akahige(*E. komadori*)

hitaki(*Phoenicurus, Tarsiger, Ficedula* 他)

58.6 ko-ruri[-bitaki] (*Erithacus cyane*); koururi(1810); 同義語: wonari(-jaku)
(1735-40)

58B Monticola(イソヒヨドリ属)

iso-hiyodori(*Monticola gularis*), cf. supra.

58C Turdus(ツグミ属)

58.17 mamijiro(*Turdus sibiricus*)

58.30 tsugumi(*T. naumanni*); 同義語: tsugu; tsuguji; tsukujiro; tsutsu; tsuzumi;
tsumugi; kematsugumi; matsugumi; matsumugi; yabutsumugi; kagome; tsug-
ime; bameki

58.23 akakokko(*T. celanops*); 同義語: shimatsugumi

58.19 kuro-utadori(*T. merula*)

58.24 mamichajinai(*T. obscurus*); 同義語: chajinai; chatsugu(-mi); mami-mamishiro-
shinai; akajinahi

58D Paradoxornithinae(ヒゲガラ科)

kara : in hige-gara ; ko-gara ; hi-gara(*Panurus, Parus, Sitta spp.*)

58.31 hige-gara(*Panurus biarmicus*); 同義語: takumidori

61.1 gojuu-kara(*Sitta europea*); 同義語: kinezumi; kimawari; kimeguri; kokemu-
shiri

- 63.1 tsurisu-gara (*Remiz pendulinus*); 同義語: takumidori
- 58E Sylviinae (ウグイス科)
- 58.32 uguisu (*Cettia diphone*); 古語 ugupisu 'id.'; popokidori 'id.'; uguhisu (1666; 1712; 1810); 同義語: hohokidori; mushikui; hanamidori; haru-no-tori; momochidori; sasaetori; todometori; 方言: 千葉 houkekyo; 愛媛 hokeyodori; kekyo; 高知 hokeshiro; 和歌山 hokejiro; 千葉, 大島, その他 chatcha; 鹿児島 detchu; 静岡 yabuchatchou; 沖縄 makita; masha; birurya
- 71.1 Kourai-uguisu (*Oriolus chinensis*); 同義語: yama-tsubame
- 58.33 yabusame (*Cettia squameiceps*); 同義語.: konowatori; michikusube
- 58.36 kikuitadaki (*Regulus regulus*); kikuitadaki (1712); 同義語: kikui (1735-40); iwakera; sugimushi; matsumushi
yoshikiri (*Acrocephalus spp.*); yoshikiri (1712); 同義語: yoshisuzume (yoshidori); ashisuzume; karakarashi; mugikarashi; kekesu (kekeshi); gera; takumidori
- 58.40 ou-yoshikiri (*A. arundinarius*)
mushi-kui (*Phylloscopus spp.*)
- 58.44 kimayu-mushikui (*P. proregulus*)
- 58F Muscicapinae (ヒタキ亜科)
- 58.51 mugimaki (*Ficedula mugimaki*); 同義語: takumitori (1735-40); ko-tsubame (1800); hannari (1810); mebachi
- 59 Paridae (シジュウカラ科)
ko-gara (*Parus montanus*) その他, cf supra.
- 60 Aegithalidae (エナガ科)
- 60.1 enaga (*Aegithalos caudatus*); 同義語: wenagatori (1712); wenagadori (1735-40); enaga (1810); gojukara (1810); kokemushiri; takumidori
- 61 Sittidae (ゴジュウカラ科)
gojuu-kara (*Sitta europea*); cf. supra.

- 62 Certhiidae (キバシリ科)
62.1 kibashiri (*Certhia familiaris*)
- 63 Remizidae (ツリスガラ科)
tsurusu-gara (*Remiz pendulinus*); cf. supra.
- 64 Zosteropidae (メジロ科)
64.1 mejiro (*Zosterops japonica*); 同義語: mejirotori (1712); kawari nojiko (1810); hanasuhi; kayamejiro; ubasukashi; okama-no-tori; 方言: 和歌山 megoro; 鹿児島 sugome; tokiwa; matchu; wataibanashi; 宮崎 hanashi; 鹿児島 hanatsuyu; okusama; 沖縄 omasa; jippouma; piruma
- 65 Meliphagidae (ミツスイ科)
65.1 meguro (*Apalopteron familiare*)
- 66 Emberizidae (ホオジロ科)
66.2 houjiro (*Emberiza cioides*); 古語 sitoto (*Emberiza* spp.); mashitoto 'id.'; 同義語: hohhojiro (1666); kaki-hohojiro; shiro-hohojiro; miyama-jitoto; mayujiro; sutosuto; nosuzume.
66.3 kashiradaka (*Emberiza rustica*); 同義語: kawari-kashira (1810); takakashira; kashira-shitodo; kashira-tori; miyako-ga-heri.
66.4 hou-aka (*E. pusilla*)
66.9 aoji (*E. spodocephala*); 古語 sitoto 'id.'; 同義語: shitodo (1666; 1712); awoji (1712; 1810); jauto (1735-40); aoshitodo (1800); kawariawoji (1810); shitoto (1826); kiawoji; kishitodo; awojitoto; yamashitoto: -ji < shi (todo)
66.10 nojiko (*E. sulphurata*); nojiko (1712; 1800; 1810); 同義語: shiro-nojiko; yachiko (1810)
66.15 kuroji (*E. variabilis*); 同義語: kuroshitodo (1800); kurosuzume; sumiyaki shitodo (*Zonotrichia* spp.)
66.21 miyama-shitodo (*Z. leucophrys*)
- 67 Fringillidae (アトリ科)

- hiwa (*Carduelis*, *Acanthis* spp.)
- 67.1 kawara-hiwa (*Carduelis sinica*); 同義語: awosu; asahiki; kisuzume.
- 67.5 atori (*Fringilla montifringilla*); 古語 atori 'id.'; 同義語: atsutori (1729); ko-
atori; ubasukashi; usuhikidori
mashiko (*Carpodacus* 他); mashiko (1715); 同義語: mashikotori (1712).
- 67.6 hagi-mashiko (*Leucostricte arctoa*); 同義語: hagi-tori (1729); hagi-suzume;
awadori
- 67.14 uso (*Pyrrhula pyrrhula*); 同義語: usotori (1712); usohime; ama-uso; ko-uso;
kuro-uso; teriuso; kotohikutori; bonteki
- 67.16 ikaru (*Eophona personata*); 古語 ikaruga 'id.'; 同義語: ikaruga (~ ikarugo);
ikana; mame-dori (1666); mame-mahashi (1810); mame; mame-kuchi; mame-
totoki; mame-wari; mukuguhi
- 67.17 shime (*Coccothraustes coccothraustes*); 古語 pime スズメ科 (Ploceidae) に属
す鳥, 多分 = shime (シメ); shime (1712; 1810); 同義語: hime (1712); shume;
mamekuchi
- 68 Ploceidae (ハタオリドリ科)**
- 68.2 suzume (*Passer montanus*); 古語 suzume; 同義語: suzumi; (aka-/kuro-/shi-
ro-)suzume; madara-suzume; mossu; sazaki; wataboushi; 方言: 東京 tsuzu; 茨
城 niwasuzu; suzuneme; 千葉 ohaguro; jijikuro; jinkuro; chijikuro; chinchinko;
栃木 chinchinme; 茨城 chinchin; 三重 chichime; 千葉 ijiwaru; 富山 chonma;
banchoko; babasuzume; 千葉 fukura; 三重他 itakura; 和歌山 itakuro; 千葉
masuko; 茨城 masuzu; 鹿児島 yomondori; 沖縄 funadori; padou
- 69 Sturnidae (ムクドリ科)**
- 69.1 mukudori (*Sturnus cineraceus*); 同義語: muku; mukuwari; ohomuku; naha-
shirotori
- 69.7 (hakkachou) (*Acridotheres cristatellus*); hakkachou (1666; 1712); 同義語: ha-
hateu (1715); hakka; kokumaru
- 70 Dicruridae (オウチュウ亜科)**
- 70.1 (ouchuu) (*Dicrurus macrocercus*); 同義語: yama-tsubame

- 71 Oriolidae(コウライウグイス科)
71.1 Kourai-uguisu ; 同義語: heruberu-teu; *cf. supra.*
- 72 Artamidae(モリツバメ科)
72.1 mori-tsubame; *cf. supra.*
- 73 Corvidae(カラス科)
73.1 kakesu (*Garrulus glandarius*); 同義語: kashitori (1712; 1729); kagisu (1735-40); okase-hatsushi (1735-40); kakesutori; gaisu; gatchi; kushihiki
73.3 onaga (*Cyanopica cyana*); 同義語: wonaga (-dori); sakatori;
73.4 kasasagi (*Pica pica*); 古語 kasasagi 'id.'; 同義語: kijaku (1735-40); chikugokarasu; higo-garasu; kachigarasu
karasu (*Corvus spp.*); 古語 karasu ; koro 'id.'; 同義語: ohowosodori; himosutori; 方言: 青森, 三重gaga; 島根 kaaka; 奈良 gaya-gaya; 秋田 karukaru; 山形 sarae.
3.3 Chishima-ugarasu (*Phalacrocorax urile*)
6.1 umigarasu (*Uria aalge*)
55.1 kawagarasu (*Cinclus pallasii*)
73.7 miyama-garasu (*Corvus frugilegus*)

Bibliography

- Aikens, C. Melvin and Takayasu Higuchi. *Prehistory of Japan*. New York: Academic Press (1982)
- Atran, Scott. *Cognitive foundations of natural history*. Cambridge and New York: Cambridge University Press (1990)
- “Itzaj maya folk biological taxonomy,” in Medon and Atran (eds.). *Folk Biology*.
- Berlin, Brent. *Ethnobiological classification: principles of categorization of plants and animals in traditional societies*. Princeton: Princeton University Press (c.1992)
- *The perceptual bases of ethnobiological classification: evidence from Aguaruna Jivaro ornithology*. Berkeley: University of California (1980)

- Berlin, Brent and Paul Kay. *Universality and evolution of basic color terms*. Berkeley: University of California (1967)
- Chang, J. Wang-Fu. *A Field Guide to the Birds of Taiwan*. Taichung (1980)
- Cheng, Tso-Hsin. *A Distribution List of Chinese Birds*. Peking: Science Publishing House (1976)
- Chew, J. J. "The Prehistory of the Japanese language in light of evidence from the structures of Japanese and Korean," *Asian Perspectives*, 19 (No.11)
- Diamond, Jared and K. David Bishop. "Ethno-ornithology of the Ketengban people, Indonesian New Guinea," in Medon and Atran (eds.), *Folkbiology*.
- Fukuda Genjiro, ed. 原色日本動物図鑑, 東京: 北隆館 (1995)
- Kiyosu, Y. *The Birds of Japan*. 3 Vols. Tokyo: Kodansha (1965).
- Masuda, Koh (ed.). *Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary*. Tokyo: Kenkyusha (1974)
- Medon, Douglas L. and Scott Atran (eds.). *Folkbiology*. Cambridge: MIT Press (1994)
- Miller, Roy Andrew. *Origins of the Japanese Language*. Seattle: University of Washington Press (1980)
- Munitz, Milton K. *Logic and ontology*. New York: New York University Press (1973)
- Munro, Neil Gordon. *Prehistoric Japan*. First published 1911. Reprint. New York/London: Johnson Reprint Corp. (1971)
- Omodaka Hisakata et al. (eds.) 時代別国語大辞典 (上代編), 東京: 三省堂 (1967)
- Quine, Willard van Orman. *A Theorem in the calculus of classes*. London: C.F. Hodgson (1932)
- "On existence conditions for elements and classes," *Journal of Symbolic Logic*, Vol. 7, No. 4 (December 1942)
- "On the theory of types," *Journal of Symbolic Logic*, Vol. 3, No. 4 (December 1938)
- Peters, J. L. *Check-list of Birds of the World*. Cambridge: Museum of Comparative Zoology (1962-79).
- Rea, Amadeo M. *Folk mammology of the Northern Pimans*. Tucson: University of Arizona Press (c1998)
- Redelmeier, Donald A. and Amos Tversky. *Weighing evidence: The design and comparison of probability thought experiments*. Boston: Harvard Business School (1983)

- Rouse, Irving. *Migrations in Prehistory*. New Haven and London: Yale University Press(1986)
- Sansom, George. *A History of Japan to 1334*. Stanford: Stanford University Press (1968)
- Sato Junichi. 日本方言辞典, 東京: 小学館 (2004)
- Serizawa Chosuke. “The Stone Age of Japan,” *Asian Perspectives*, 19 (No.1)
- Shepard, Roger N. “Pattern goodness and pattern recognition,” in James R. Rockhead, *The Perception of structure: essays in honor of Wendell R. Garner*.
- Sonobe Koichiro (ed.). *A Field Guide to the Birds of Japan*. Wild Bird Society of Japan. Tokyo and New York: Kodansha International(1982)
- Sugawara Hiroshi and Kakizawa Ryuzou. 日本鳥名由来辞典, 東京: 柏書房 (1993)
- Takano, S. *Handbook of the Field Identification of Japanese Birds*. Tokyo: Wild Bird Society of Japan(1981)
- Tversky, Amos. “Features of similarity,” in *Psychological Review*(1977)
- Yamashina, Y. *A Natural History of Japanese Birds*. Reprint. Tokyo(1980)